

すでにご案内をさせていただいております、岩城敏之先生の講演会は今年で5回目となり、今回は「遊びが育てる非認知能力」～20年後を見通した子育て～という題目でお話をして頂きます。この題目にもあります「非認知能力」という言葉をご存じの保護者の方は少ないと思いますが、人が生涯に渡りのびのびと学び、成長を続けていくのを支えるのが、幼児期から育てる「非認知能力」です。今後幼児教育の中で意識的に育成することが求められるようになります。この「非認知能力」についてまとめてみました。

## 今教育現場で注目の 非認知能力とは

「非認知能力(スキル)」は、これからの幼児教育のキーワードになります。

非認知能力は、OECD(経済協力開発機構)では社会情動的スキルと言われます。

IQなどで数値化される認知能力と違って目に見えないのですが、「学びに向かう力や姿勢」とも言い表せるでしょう。目標や意欲、興味・関心をもち、粘り強く、仲間と協調して取り組む力や姿勢が中心になるとお考えください。

近年、非認知能力は日本だけではなく、世界中で研究が進み、その重要性が認識されています。とりわけ議論が盛んなのは欧米です。というのも、従来、欧米の幼児教育は読み書きや思考力などの知的な教育が中心でした。しかし、幼児期の知的教育の効果は一時的なものに過ぎず長続きしないことが明らかになり、認知能力の土台となる非認知能力がクローズアップされてきているからです。加えて、非認知能力は幼児期から小学校低学年に育成するのが効果的という研究成果も注目されています。

## 三つの課題を克服すれば 「非認知能力」は育つ

一方、日本は欧米とは少々異なる文脈で非認知能力の必要性が論じられています。知的教育に重点を置いてきた欧米とは違い、日本の幼児教育は「心情・

意欲・態度」を大切にすることで、非認知能力を育成してきたと言えます。しかし振り返ってみると、いくつか課題が見えてきます。

ひとつは、日本では特に意欲や興味・関心を大切にしてきましたが、非認知能力の重要な要素である粘り強さや挑戦する気持ちなどの育成はそれほど重視されていませんでした。

ふたつめとして、認知能力と非認知能力は絡み合うように伸びるという認識が弱かったと思います。どういうことかという、意欲や関心をもち粘り強く取り組むと、自然に深く考えたり工夫したり創造したりして認知能力が高まります。そのように認知能力が発揮された結果、達成感や充実感が得られ、「次もがんばろう」と非認知能力が強化されます。こうしたサイクルを意識することで、認知能力と非認知能力は効果的に伸ばせるのです。

3つめとして、こうした姿勢や力は、従来、気質や性格と考えられがちでした。現在の議論では、これを「スキル」と捉えて教育の可能性を強調しています。例えば、子どもの興味・関心は保育者の環境づくりにより意図的に高められますし、粘り強さは励ますことで伸ばせます。あえて「スキル」と呼ぶことで、具体的な支援を通して子どもができるようになることを示しているのです。

参考文献

ベネッセ教育総合研究所これからの幼児教育

本園でも、従来の保育を振り返って、子どもがおもしろいと感じたり、関わったりしたくなる素材をふんだんに用意したり保育者が対話を通して、子どもの発想を豊かにしたり考えを深めたりするなど、今後はさらに非認知能力を育てる活動を充実させていきたいと思っております。

「非認知能力」を家庭教育でもどう伸ばすか、岩城先生のお話の中に実践のヒントが!!!  
どうぞたくさんのご参加をお待ちしています。

締め切りは7月14日(金)

岩城敏之先生講演会7月20日(木) 15時～  
「遊びが育てる非認知能力」～20年後を見通した子育て～